

朱子語類論文篇譯注(二)

興膳 宏 京都大學

木津 祐子 京都大學

齋藤 希史 奈良女子大學

20 大率文章盛、則國家却衰。如唐貞觀・開元都無文章、及韓昌黎・柳河東以文顯、而唐之治已不如前矣。汪聖錫云、「國初制詔雖粗、却甚好」。又如漢高八年詔與文帝即位詔、只三數句、今人數衍許多、無過只是此箇柱子。若海。韓柳。だいたい文章の盛んな時代には、國家は衰える。唐の貞觀と開元の世には、いずれも文章がなかったが、韓昌黎や柳河東が文章によって名をあらわすようになる、唐の治政はもう以前に及ばなくなっていた。汪聖錫がいうには、「わが宋朝初期の制詔はあらけざりだが、かえってそこが

よい」と。また、漢の高祖八年の詔と、文帝の即位の詔のようなのは、たった數句だけだが、いまの人が、さんざん引き伸ばしても、骨子は要するにこれだけなのだ。楊若海記す。韓柳文について。

(校勘) 朝鮮古寫本 末尾の「韓柳」を缺く。

(注) 汪聖錫は、汪應辰(一一八一―一七六)、聖錫は字。

『宋史』卷三八七。陳振孫「直齋書錄解題」には「玉山翰林詞草五卷」を著録して、「天材甚高、而不喜爲文、謂不宜弊精神於無用、然每作輒過人。以天官兼翰苑近二年、所撰制詔溫雅典實、得王言體、朱晦翁稱爲近世第一」と評する。

「漢高八年詔」は、『漢書』高帝紀五年の「兵不得休八年、萬民與苦甚、今天下事畢、其赦天下殊死以下」とある令を指すか。高帝八年に下された詔は、『漢書』郊祀志上に別に見られるが、むしろこの論旨にはこの令のほうがふさわしい。

「文帝即位詔」は、『漢書』文帝紀に「制詔丞相・太尉・御史大夫。問者諸呂用事擅權、謀爲大逆、欲危劉氏宗廟、賴將相列侯宗室大臣誅之、皆伏其辜。朕初即位、其赦天下、賜民爵一級、女子百戶牛酒、酺五日」とある。

(記錄者) 若海は、楊若海。「語錄姓氏」には楊道夫の子と

21 先生方修「韓文考異」、而學者至。因曰、「韓退之議論

正、規模闊大、然不如柳子厚較精密、如「辨鶻冠子」及說列子在莊子前及「非國語」之類、辨得皆是。」黃達才言、「柳文較古。」曰、「柳文是較古、但却易學、學便似他、不似韓文規模闊。學柳文也得、但會衰了人文字。」義剛。夔孫錄云、「韓文大綱好、柳文論事却較精覈、如「辨鶻冠子」之類。

「非國語」中儘有好處。但韓難學、柳易學。」

先生が「韓文考異」を完成されたころ、學生たちがやつて來た。そこでいわれるには、「韓退之の議論はしつかりしていて、その規模も大きい、柳子厚のほうがやや精密なものには及ばない。「辨鶻冠子」や、列子が莊子より前に存在したと説いた文（「辨列子」）や、「非國語」といった類の文章は、まったく當を得た議論だ」と。黃達才が「柳宗元の文章はやや古風ですね」というと、いわれるには、「柳宗元の文はやや古風だが、學びやすく、學べばすぐ柳宗元の文のようになるが、韓愈の文の規模の大きさには似ても似つかぬ。柳宗元の文章を學ぶのもよいが、それではきつと文章は衰えてしまふ。」黃義剛記す。夔孫の記錄に云う、「韓愈の文章は、大綱は宜しい。柳宗元の文章は、ことがらの議

論はかなり確かで、「辨鶻冠子」などがそれだ。「非國語」にもよいところがたくさんある。ただ韓愈の文は學びにくく、柳宗元の文は學びやすい。」

（校勘）朝鮮古寫本 柳文較古↓柳文較有様 學便↓細字にて記さる 義剛（記錄者名）↓缺 夔孫錄云↓夔孫錄畧云 韓難學↓但韓難學

（注）「韓文考異」は、方松卿の「韓集舉正」にもとづき、朱子がさらに校訂を加えたもの。十卷。慶元三（一一九七）年に成る。原書は早くに没し、門人の張洽がさらに校訂を加え刊行した「昌黎先生集考異」が今に傳わる。なお、文集の本文に「考異」を注の形で組みこんだのは王伯大であり、いま「四部叢刊」に收める「昌黎先生文集」はその元刊本にもとづく。

「方」はこの場合「已經」の意。「師事年攷」一七八・一八〇によれば、記錄者の黃義剛と林夔孫が同席し得るのは、一一九七年以降であり、「韓文考異」の成立後のことになる。「辨鶻冠子」は、22條注を参照。

「辨列子」は、劉向が「鄭穆公」の時の人と云うのは「魯穆公」のことではないかと疑い、「莊子」の言が多く「列子」を用いていると論じたもの。「柳河東集」卷四。なお「列子」の成立については、偽書説も含めてさまざまな議論がある。

「非國語」は、「國語」の文のうち六十七條について論難

を加えたもの。「柳河東集」卷四四。その序に、「左氏國語、其文深闊傑異、固世之所耽嗜而不已也。而其說多誣淫、不概於聖。余懼世之學者溺其文采而淪於是非、是不得由中庸以入堯舜之道。本諸理、作非國語」という。

「黃達才」は、黃柑。達才は字、達材ともいう。南豊の人。「宋元學案」卷七七「象山門人」。

22 揚因論韓文公、謂「如何用功了、方能辨古書之眞僞。」曰、「鵬冠子」亦不會辨得。柳子厚謂其書乃寫賈誼「鵬賦」之類、故只有此處好、其他皆不好。柳子厚看得文字精、以其人刻深、故如此。韓較有些王道意思、事較含洪、便不能如此。」揚

わたくし包揚が韓文公を論じたおりに、「どのように努力して、古の書物の眞僞を辨別できるよになられたのでしょうか」とたずねたところ、いわれた。「韓愈も『鵬冠子』は辨別できなかつた。柳子厚が、その書物は賈誼の『鵬鳥賦』の類を敷き寫したのだから、そこだけは良いのだが、それ以外はみなよくない、といっている。柳子厚は、文章を精密に讀んだが、その人柄がきつかつたから、

そうなつたのだ。韓愈のほうは、いささか王道的なところがあつて、何につけかなり鷹揚だつたから、ああはいかなかつたのさ。」包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「讀鵬冠子」は、全文以下の通り。「鵬冠子」十有九篇、其詞雜黃老刑名。其博選篇、四稽五至之說當矣。使其人遇時、援其道而施於國家、功德豈少哉。學問篇、稱賤生於無所用、中流失船、一壺千金者。余三讀其辭而悲之。文字脫謬、爲之正三十有五字、乙者三、減者二十有二、注十有二字云。」(『昌黎先生集』卷一一)。なお、「崇文總目」卷三には「今書十五篇、述三才變通古今治亂之道。唐世嘗辨此書後出、非古所謂鵬冠子者」という。

「辨鵬冠子」は、賈誼の「鵬鳥賦」が「鵬冠子」を用いたものだといふ世の議論に對し、「鵬冠子」が僞書であり、逆に「鵬鳥賦」を用いていると論じたもの。「余讀賈誼鵬賦、嘉其辭。而學者以爲盡出鵬冠子。余往來京師、求鵬冠子、無所見。至長沙、始得其書。讀之盡鄙淺言也。唯誼所引用爲美、餘無可者。吾意好事者僞爲其書、反用鵬賦以文飾之、非誼有所取之、決也」という。「柳河東集」卷四。賈誼「鵬鳥賦」は「史記」卷二四・「漢書」卷四八の本傳および「文選」卷一三。なお、「鵬賦」はもと「鵬賦」に作るが、朝鮮古活字本によつて改めた。

「刻深」は、きびしいこと。「戰國策」秦策に「刻深寡恩、特以強服之耳」とあるごとく古い語。のちに文章を評する語としても用いられ、韓愈「與袁相公書」には「又善爲文章、詞句刻深、獨追古作者爲徒、不顧世俗輕重」(昌黎先生集「卷一九」という。

「含弘」は、含弘・含宏に同じ。雙聲の語。「周世宗規模雖大、然性迫、無甚寬大氣象。做好事亦做教顯顯地、都無些含弘之意、亦是數短而然。」(「歷代三」一三六・325)なお含弘は「周易」坤卦に「含弘光大、品物咸亨」とある。

「王道」は、「尚書」洪範に「無偏無黨、王道蕩蕩」とあるように、三代の先王の正道をいうのが發端だが、孟子は霸道と對比させ(「梁惠王上」)、仁義によって世を治める道とした。ここにいう「王道」は、それよりも廣い意味で使われ、細かなことにこだわらない鷹揚なありかたを示すであらう。

23 退之要說道理、又要則劇、有平易處極平易、有險奇處極險奇。且教他在潮州時好、只住得一年。柳子厚却得永州力也。

韓退之は、道理を説きもしたし、おどけもした。わかりやすいところは、きわめてわかりやすく、わかりにくいところはきわめてわかりにくい。彼が潮州にやられていた時

期はよかつたが、一年住んだだけだった。柳子厚の方は永州に負うところが大きい。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「則劇」は、おどけたり、ふざけたりすること。「則」は「作」に同じ。「只是翻騰好看、做文字則劇、其實不曾說著當時事體。」(「歷代」二一三五・327)

韓愈は、元和十四(八一九)年、「論佛骨表」が憲宗の怒りを買ひ、あやうく死罪になるところを免れて潮州に流されるが、「潮州刺史謝上表」によって帝の怒りは解け、一年足らずで潮州を離れる。

柳宗元が永州に流されたのは貞元二十一(八〇五)年、以後元和十(八一五)年までの十年間を彼の地で過ごす。永州での柳宗元については、韓愈の「柳子厚墓誌銘」(昌黎先生集「卷三」)に「居閒益自刻苦、務記覽、爲詞章、汎濫停蓄、爲深博無涯涘、而自肆於山水間」という。

24 柳學人處便絶似。「平淮西雅」之類甚似「詩」、詩學陶者便似陶。韓亦不必如此、自有好處、如「平淮西碑」好。揚柳宗元が人をまねるとそっくりになる。「平淮西雅」などは「詩經」にそっくりだし、陶淵明にまねた詩は陶淵明そのものだ。韓愈のほうはそうするまでもなく、獨自のよ

さがある。「平淮西碑」などはよい。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「平淮西雅」は正しくは「平淮夷雅」。元和十二(八一七)年、淮西の吳元濟の軍を平定したのを慶賀した作。

「柳河東集」卷一。「獻平淮夷雅表」には、「今又發自天衷、克勦淮右、而大雅不作。臣誠不佞、然不勝憤懣。伏以朝多文臣、不敢盡專數事、謹撰平淮夷雅二篇。雖不及尹吉甫召穆公等、庶施諸後代、有以佐唐之光明」という。

陶淵明に真似た詩には、「田家」三首、「飲酒」、「詠荊軻」(いずれも「柳河東集」卷四三)など、多く見られる。また、宋の陳善『捫蝨新話』卷七に「柳子厚白樂天學詩、東坡和陶詩」という條が見える。

「平淮西碑」は、柳宗元「平淮西雅」と同時期の作。このとき韓愈は從軍の任にあつた。『昌黎先生集』卷三〇。

25 陳仲蔚問、「韓文」「禘義」、說懿獻二廟之事當否。」曰、「說得好。其中所謂興聖廟者、乃是涼武昭王之廟、乃唐之始祖。然唐又封皋陶爲帝、又尊老子爲祖、更無理會。」又問、「韓柳二家、文體孰正。」曰、「柳文亦自高古、但不甚醇正。」又問、「子厚論封建是否。」曰、「子厚說「封建非聖人意也、勢也。」亦是。但說到後面有偏處、後人辨之者亦

失之太過。如廖氏所論封建、排子厚太過。且封建自古便有、聖人但因自然之理勢而封之、乃見聖人之公心。且如周封康叔之類、亦是古有此制。因其有功、有德、有親、當封而封之、却不是聖人有不得已處。若如子厚所說、乃是聖人欲吞之而不可得、乃無可奈何而爲此。不知所謂勢者、乃自然之理勢、非不得已之勢也。且如射王中肩之事、乃是周末征伐自諸侯出、故有此等事。使征伐自天子出、安得有是事。然封建諸侯、却大故難制御。且如今日蠻洞、能有幾大。若不循理、朝廷亦無如之何。若古時有許多國、自是難制。如隱公時原之一邑、乃周王不奈他何、賜與鄭、鄭不能制。到晉文公時、周人將與晉、而原又不服、故晉文公伐原。且原之爲邑甚小、又在東周王城之側、而周王與晉鄭俱不能制。蓋渠自有兵、不似今日太守有不法處、便可以降官放罷。古者大率動便是征伐、所以孟子曰、「三不朝則六師移之。」在周官時已是如此了。便是古今事勢不同、便是難說。」因言、「孟子所謂五等之地、與周禮不同。孟子蓋說夏以前之制、周禮乃是成周之制。如當時封周公於魯、乃七百里。於齊尤闊、如所謂「東至於海、西至於河、南至於穆陵、北至於無

棟。」以地理考之、大段闕。所以禹在塗山、萬國來朝。至周初、但千八百國。」又曰、「譬如一樹、枝葉太繁時、本根自是衰枯。如秦始皇則欲削去枝葉而自留一幹、亦自不可。」義剛。

陳仲蔚が尋ねた、「韓愈の「禘議」が、懿祖・獻祖の二廟のことを説いているのはいかがですか。」いわれるには、「うまく説いている。そのなかの「興聖廟」というのは、涼武昭王の廟のことで、つまり唐の始祖の廟だ。けれども唐は阜陶を帝として封じてもあるし、また老子を祖と崇めてもいて、まったくわけがわからん。」さらに尋ねた、「韓愈と柳宗元では、どちらの文が正格でしょうか。」いわれるには、「柳文はやはりおのずと高古だが、あまり醇正ではない。」また尋ねた、「柳子厚が封建を論じているのはどうでしょう。」いわれるには、「子厚が「封建は聖人の意に非ざるなり、勢なり」と説くのは、やはり正しい。しかし後のほうになると偏りがあつて、後人でこれをあげつらう者もやはりひどい外れだ。廖氏の封建論などは、子厚非難の度が過ぎている。それに封建というのは昔からあるの

であつて、聖人はただ自然の形勢によつて封じたまでであり、そこに聖人の公平な心が示されているのだ。たとえば周が康叔を封じたようなものは、やはり昔からこの制度があつたということだ。功があり、徳があり、親しむところがあるために、封ぜられるべくして封ぜられたのであり、聖人にやむを得ないところがあつたわけではない。もしも子厚が説くようなことであれば、聖人は封建をなくそうとしてできず、どうしようもなくしてそうしたということになる。勢というものが自然の形勢であつて、やむを得ざるの勢ではないということが分かつていないのだ。例えば「王を射て肩に中つ」ということなどは、周末の征伐が諸侯から出たものであるがゆえに、こうしたことがあつたのである。征伐が天子から出ていたならどうしてこんなことがありえよう。けれども封建諸侯の方が強大だったから、抑えるのが難しかったのだ。たとえば今日の蠻族どもの力なんてたかが知れているが、道理に従わないことがあると、朝廷はどうしようもない。昔は多くの國があつたのだから、おのずと抑えることは難しい。隱公の時、原げんという邑まちを周

王は手に負えなくなつて、鄭に下賜したけれども、鄭も制御できず、晉の文公の時になつて、周の人が晉に與えようとしたけれども、原はそれにも服さなかつたために、晉の文公が原を征伐した。原のような小さい邑で、そのうえ東周の王城の近くにあつてさえ、周王も晉も鄭も制御できなかったのだ。思うに原にはもちろん軍隊があり、今日の太守が法に違反すれば、降格したり罷免してしまえばいいというようなわけにはいかなかつた。古えはだいたい何かと

いうとすぐに征伐をおこなつたものだ。だから孟子は「三たび朝せざれば、六師之を移す」といつたのであり、周禮の官制の時代にはすでにこうだつたのだ。古えと今では事情も異なる以上、説き明かすのは難しい。そこでいわれるには、「孟子のいう五等の地は、周禮とは異なる。孟子はおそらく夏以前の制度をいつていて、周禮の方は成周の制度なのである。かつて周公を魯に封じた時は、地は七百里四方もあつた。齊の場合はことに廣く、「東は海に至り、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣に至る」というありさまだつた。地理的に考えてみると、じつに廣い。ゆ

えに禹は塗山に居て、萬國が來朝したのに、周の初めには、ただ千八百國だけになつたのだ。」またいわれた、「一本の木に喩えるなら、枝葉が茂りすぎると、根幹はおのずと枯れてしまふ。秦の始皇帝は枝葉を削つて幹だけにしようとしたが、それもむろん駄目だ。」義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 涼武昭王之廟↓梁武昭王之廟【梁字恐是涼】乃見聖人之公心↓巧見聖人之公心 當封而封之↓而封之 乃是周末征伐自諸侯出↓乃是周末自諸侯出 使征伐自天子出↓如使征伐自天子出 賜與鄭↓遂賜與鄭

(注) 「陳仲蔚」は、名、出身とも未詳。『師事年攷』179。

「禘議」は、「禘禘議」のこと。『昌黎先生集』卷一四。

「懿獻」は、獻祖、懿祖のこと。『新唐書』玄宗本紀に、「〔開元十一年〕八月戊申、追號宣皇帝曰獻祖、光皇帝曰懿祖」とある。

「涼(涼)武昭王」は李高。『新唐書』高祖本紀に、「高祖神堯大聖大光孝皇帝、諱淵、字叔德、姓李氏、隴西成紀人也。其七世祖高、當晉末據秦・涼以自王、是爲涼武昭王」とある。またその廟號が「興聖」であることは、玄宗本紀に「(天寶二年)三月壬子……追號涼武昭王曰興聖皇帝」という。

唐朝が阜陶を帝とし老子を奉つたことは、よく知られてゐる。例えば『封氏聞見記』卷一には「國朝以李氏出自老君、

故崇道教。……高宗乾封元年、還自岱嶽過眞源縣、詣老君廟、追尊爲玄元皇帝」とあり、また「唐會要」卷二二には「天寶二年三月二十八日、追尊臯陶爲德明皇帝」とある。

「封建論」は、「彼封建者、更古聖王堯舜禹湯文武而莫能去之。蓋非不欲去之也、勢不可也。勢之來、其生人之初乎。不初、無以有封建。封建非聖人意也」のように、その制度が聖人の意にもとづくのではなく、「勢」のやむをえざるところによるのだ、と説くもの。「柳河東集」卷三。

「廖氏」は、廖僂。「宋文鑑」卷九四にその「封建論」が見える。「如子厚之論、是蓋知其末而不知其本、知其末而不知其本、故以封建爲非」のように、その柳宗元批判は嚴しい。周が康叔を衛に封じたことについては、「史記」衛康叔世家に見える。

「射王中肩之事」は、「左傳」桓公五年に、周の桓王を鄭の大夫祝聃が射て肩に命中させたことをいう。「封建論」では「厥後問鼎之輕重者有之、射王中肩者有之」のように言及する。

「征伐自諸侯出」は「論語」季氏に「天下有道、則禮樂征伐、自天子出。天下無道、則禮樂征伐、自諸侯出」とあるのにもとづく。

「蠻洞」は、南方の蕃族。「宋史」卷四九三・四九四に「西南溪峒諸蠻、上下傳」があり、さらに同卷四九五にも「世念等遂與諸蠻峒首領族類四千五百人出降」とある。また「老

學庵筆記」卷三に「筇竹杖蜀中無之、乃出徼外蠻峒」。

「原邑」は、「左傳」隱公十一年に鄭に與えたことが見え、また僖公二十五年に晉がそれを攻めたことが見える。

「三不朝」は、「孟子」告子下に、「一不朝則貶其爵、再不朝則削其地、三不朝則六師移之」とある。

「五等」は、「孟子」萬章下に「天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、凡五等也」とあり、「禮記」王制には「王者之制祿爵公侯伯子男、凡五等」とある。

周公を魯に封じたことは、「禮記」明堂位に「是以封周公於曲阜、地方千里、革車千乘」という。

齊の領地については、「左傳」僖公四年に、「春、齊侯以諸侯之師侵蔡、蔡潰、遂伐楚、楚子使與師言曰、君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也。不虞君之涉吾地也、何故。

管仲對曰、昔、召康公命我先君大公曰、五侯九伯、女實征之、以夾輔周室、賜我先君履、東至于海、西至于河、南至于穆陵、北至于無棣」という。

「千八百國」については、「漢書」地理志に、「周爵五等、而土三等、公侯百里、伯七十里、子男五十里、不滿爲附庸、蓋千八百國」という。

26 有一等人專於爲文、不去讀聖賢書。又有一等人知讀聖賢書、亦自會作文、到得說聖賢書、却別做一箇詫異模樣說。



不知古人爲文、大抵只如此。那得許多詭異。韓文公詩文冠

當時、後世未易及。到他上宰相書、用「菁菁者莪」詩注、

一齊都寫在裏面。若是他自作文、豈肯如此作。最是說「載

沈載浮」、「沈浮皆載也」、可笑。「載」是助語、分明彼如此

說了、他又如此用。賀孫。韓文。

文章を作つてばかりいて、聖賢の書物を讀もうとしない人がいる。その一方では聖賢の書物も讀めるし、自分でも文章を書けるのに、聖賢の書物を説く段になると、おかしな言い方をする人もいる。古人が文を作るときは、たいていこんなふうだったのが分からないのだ。何もおかしなことではないはずなのに。韓文公の詩文は當時に冠たるもので、後世の人はなかなか及び難い。なのに彼の「宰相に上る書」では、「菁菁者莪」の詩も注もみな文章の中に書きこんでしまっている。もし彼が自分の文を作るのなら、こんなふうにしたらどうか。最もひどいのは「載沈載浮」を「沈浮皆な載する也」という箇所で、笑止の極みだ。「載」は助字だよ。人がそういうふうにいっていたのを、彼がそのまま用いたのは明らかだ。葉賀孫記す。以下韓愈の文につ

いて。

(校勘) 朝鮮古寫本 有一等人↓又云有一等人 亦自會作文

↓亦曰會作文 沈浮皆載也↓缺 末尾の「韓文」を缺く。

(注) 「上宰相書」(昌黎先生集卷一六)は、「詩之序曰、

菁菁者莪、樂育材也。君子能長育人材、則天下喜樂之矣。其

詩曰、菁菁者莪、在彼中阿、既見君子、樂且有儀。說者曰、

菁菁者、盛也。莪、微草也。阿、大陵也。言君子之長育人材、

若大陵之長育微草、能使之菁菁然盛也。……其卒章曰、汎汎

楊舟、載沈載浮、既見君子、我心則休。說者曰、載、載也。

沈浮者、物也。言君子之於人才、無所不取、若舟之於物、浮

沈皆載之云爾。……」という。これは、「毛傳」の「楊木爲

舟、載沈亦沈、載浮亦浮」、及びことに「鄭箋」の「舟者沈

物亦載、浮物亦載。喻人君用士、文亦用、武亦用、於人之材

無所廢」にもとづく。朱子「集注」は、「載、則也。載沈載

浮、猶言載清載濁、載馳載驅之類」のように助字に解する。

「詭異」は、おかしなこと。咤異とも表記する。「若有些

子咤異、便不是極精極密、便不是中庸。」(中庸一綱領」

六一・1482)

27 退之「除崔群侍郎制」最好。但只有此制、別更無、不知如何。義剛

退之の「崔群侍郎を除するの制」は、非常によい。ただ制

はこれがあるだけで、他にまったくないのは、どういいうわけなんだろう。黄義剛記す。

(注) 「除崔群戸部侍郎制」は、『昌黎先生集』外集卷五。

韓愈が知制誥に任じられたのは元和十(八一五)年、翌年には太子右庶子に降格されている。

28 或問、「伯夷頌」「萬世標準」與「特立獨行」、雖足以明君臣之大義、適權通變、又當循夫理之當然者也。」先生曰、「説開了、當云雖武王周公爲萬世標準、然伯夷叔齊惟自特立不顧。」又曰、「古本云、「一凡人沮之譽之。」與彼夫聖人是一對、其文義尤有力。」椿。

ある人が訊ねた、「伯夷の頌」の「萬世の標準」と「特立獨行」とは、君臣の大義が臨機應變であることを明らかにしながらも、やはりまたかの理の當然というものに従うべきだということでしょうか。」先生はいわれた、「平たくいふと、武王や周公は萬世の標準だが、伯夷や叔齊はただ自ら孤立して顧みなかったということなのさ。」またいわれた、「古いテキストは、「一凡人 之を沮み之を譽むれば……」とするが、こうすると「かの聖人は……」と對をな

して、文意に迫力がでてくる。」魏椿記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 雖足以明君臣之大義↓雖是以明君臣之大義

朝鮮古活字本 夫理之當然↓天理之當然

(注) 「伯夷頌」には、「士之特立獨行、適於義而已。不顧人之是非、皆豪傑之士、信道篤而自知明者也。……若伯夷者、窮天地亘萬世而不顧者也。……今世之所謂士者、一凡人譽之、則自以爲有餘。一凡人沮之、則自以爲不足。彼獨非聖人而自是如此。夫聖人乃萬世之標準也。余故曰、若伯夷者、特立獨行、窮天地亘萬世而不顧者也」といふ。『昌黎先生集』卷一二。『考異』が、「一凡人」に「諸本兩句皆作凡人。唯范本兩句作一凡人、乃與下文非聖人者相發明。諸本非是」といふのは本條の後半に對應し、また「萬世之標準也」に「……又按、此篇之意、所謂聖人、正指武王・周公而言也。既曰聖人、則固爲萬世之標準矣。而伯夷者、乃獨非之而自是如此、是乃所以爲窮天地亘萬世而不顧者也。與世之以一凡人之毀譽而遽爲喜愠者、有間矣。近世讀者多誤以伯夷爲萬世標準、故因附見其説云」といふのは、本條の前半に對應していよう。

「夫理之當然」は、「天理之當然」に作るテキストもある。校勘参照。

29 退之「送陳彤秀才序」、多一不字、舊嘗疑之、只看過

了。後見謝子暢家本、乃後山傳歐陽本、圈了此不字。

退之の「陳彤秀才を送る序」には、「不」の字が一字よけいだ。前にも不審に思いながら、讀み流してしまつた。後に謝子暢の家藏の本——これは後山が傳えた歐陽本だが——を見ると、この「不」の字が圈點で消してあつた。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「送陳彤秀才序」は「送陳秀才彤序」(「昌黎先生集」卷二〇)。その「夫湖南之於人、不輕以事接、爭名者之於藝、不可以虛屈。吾見湖南之禮有加、而同進之士交譽也。又以信吾信之不失也。如是而又問焉以質其學、策焉以考其文、則何信之有」の「何信之有」に、「考異」は「諸本何下有不字。方本亦然。○舊讀此序、嘗怪則何不信之有以下、文意斷絶、不相承應、每竊疑之。後見謝氏手校真本、卷首用建炎奉使之印、末有題字云、用陳無己所傳歐公定本讎正、乃刪去此二不字。初亦未曉其意、徐而讀之、方覺此字之爲礙、去之而後、一篇之血脈始復通貫。因得釋去舊疑。嘗謂此於韓集最爲有功、但諸本既皆不及。方據謝本爲多、而亦讀遺此字、豈亦未嘗見其真本耶。嘗以告之、又不見信。故今特刪不字、而復詳著其說云」といい、本條に説くところと重なる。

「謝子暢」は、謝敷經。子暢は字。「宋元學案」補遺卷二四。「謝子暢家本」とは、前注にいう「謝氏手校真本」である。

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

「圈了」とは、圈點で印をして抹消を示すこと。見せ消ち。

30 韓退之墓誌有怪者了。

韓退之の書いた墓誌には變なものもあるね。

(校勘) 朝鮮古寫本 雖足以明君臣之大義↓雖是以明君臣之大義

31 先生喜韓文「宴喜亭記」及「韓弘碑」。碑、老年筆。方

先生は、韓愈の文では、「宴喜亭の記」と「韓弘の碑」を好まれた。碑は老年の文章だ。楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 雖足以明君臣之大義↓雖是以明君臣之大義

(注) 「宴喜亭記」は、「燕喜亭記」(「昌黎先生集」卷二三)。貞元二十(八〇四)年、すなわち韓愈三十七歳の作。

「韓弘碑」は、「司徒兼侍中書令贈大尉許國公神道碑銘」(「昌黎先生集」卷三三)。長慶三(八三三)年、すなわち韓愈の没する前年の作。

32 「唐僧多從士大夫之有名者討詩文以自華、如退之「送文暢序」中所説、又如劉禹錫自有一卷送僧詩。」或云、「退

之雖關佛、也多要引接僧徒。」曰、「固是。他所引者、又却都是那破賴底僧、如靈師、惠師之徒。及晚年見大顛於海上、說得來闊大勝妙、自然不得不服。人多要出脫退之、也不消得、恐亦有此理也。」廣。

「唐代の僧には、名のある士大夫に詩文を乞うて自分を飾るものが多い。例えば退之が「文暢を送る序」で述べているし、また劉禹錫にも一卷の僧を送った詩がある。」ある者がいうには、「退之は佛教を斥けながら、よく僧侶と付き合おうとしていましたね。」いわれるに、「そのとおり。彼が付き合ったのは、みな靈師とか惠師とかの、やくざ坊主ばかりだ。晩年に大顛に潮州で出會うと、その話がでかくてりっぱなので、おのずと恐れ入らざるを得なかつた。退之のためにいいわけしようとする人がよくあるが、無用なことだ。そんなこともあろうさ。」輔廣記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 曰く如靈師惠師之徒を缺く。

(注) 「送文暢序」は、「送浮屠文暢師序」(「昌黎先生集」

卷二〇)。「浮屠師文暢喜文章、其周遊天下、凡有行、必請於摺神先生以求咏詩其所志。貞元十九年春、將行東南、柳君宗

元爲之請、解其裝、得所得敍詩累百餘篇。非至篤好、其何能致多如是邪。惜其無以聖人之道告之者、而徒舉浮屠之說贈焉」といふ。

劉禹錫の文集のうち、第二十九卷はすべて送僧詩、都合二十四首を載せる。

「破賴僧」は、やくざな坊主というほどの意。「破落僧」とも。次の注にみえる「無賴」もほほ同じ意。

「靈師」「惠師」については、韓愈に「送靈師」「送靈師」(「昌黎先生集」卷二)がある。「語類」にも「退之晩來覺沒頓身己處、如招聚許多人博塞爲戲、所與交如靈師、惠師之徒、皆飲酒無賴」(「戰國漢唐諸子」一三七・325)などのように見える。

大顛の傳は、「景德傳燈錄」一四「潮州大顛和尚」を参照。また韓愈と大顛との交遊については、「與大顛師書」(「昌黎先生集」外集二)、また「與孟尚書書」(「昌黎先生集」卷一八)に見える。後者には「來示云、有人傳愈近少信奉釋氏、此傳之者妄也。潮州時、有一老僧號大顛、頗聰明、識道理、遠地無可與語者。故自山召至州郭、留十數日、實能外形骸以理自勝、不爲事物侵亂。與之語、雖不盡解、要自胸中無滯礙、以爲難得、因與來往」といふ。「戰國漢唐諸子」(一三七)の韓愈の諸條に詳しい。例えば、「先生考訂韓文公與大顛書。堯卿問曰、「觀其與孟簡書、是當時已有議論、而與之分解、不審有崇信之意否。」曰、「眞箇是有崇信之意。他是貶從那潮

州去、無聊後、被他說轉了。」(3273)「……平日只以做文吟詩、飲酒博戲爲事。及貶潮州、寂寥、無人共吟詩、無人共飲酒、又無人共博戲、見一箇僧說道理、便爲之動。」(3274)など。

「勝妙」は、佛語。きわめてすぐれていること。

「出脱」は、いいわけを與えること。「伯恭凡百長厚、不肯非毀前輩、要出脱回護」(「詩一綱領」八十・2074)など。なお、韓愈が大顛に傾倒したことについては早くから議論があり、「與大顛師書」もその眞僞が定まらなかつた。歐陽脩が「與大顛師書」を韓愈の作とし、蘇軾がそれに反對して韓愈を辯護したことは有名。

33 先輩好做詩與僧、僧多是求人詩序送行。劉禹錫文集自有一册送僧詩、韓文公亦多與僧交涉、又不曾見好僧、都破落戸。然各家亦被韓文公說得也狼狽。文公多只見這般僧、後却撞著一箇大顛、也是異事。人多說道被大顛說下了、亦有此理。是文公不曾理會他病痛、被他纔說得高、便道是好、所以有「頗聰明、識道理、實能外形骸以理自勝」之語。賀孫。

先人は好んで僧に與える詩を作り、僧はよく自分を送る

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

詩序を求めた。劉禹錫の文集には、僧を送る詩一卷があり、韓文公も僧とよくつきあつたが、ろくな僧に出會わず、やぐざ坊主ばかりだつた。そしてみな韓文公にさんざん論破された。文公はこんな僧にはかり會つていたが、のちに大顛という僧に出くわしたのは、稀有のことだつた。人は(韓愈が)大顛に言いくるめられたというが、そんなこともあろうさ。文公は彼(大顛)の痛いところを知らないの、ちよつと高尚なことをいわれると、こいつはいいと思つてしまつた。だから「頗る聰明にして、道理を識る。實に能く形骸を外にし、理を以て自ずから勝る」という文句が出てきたのさ。葉賀孫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 自有一卷送僧詩↓自是一卷送僧詩 以理自勝之語↓以理自勝

(注) 「破落戸」は、ごろつき、ろくでなし。白話小説などに常見される語だが、「語類」はその早い例。「前條の「破頼」とほぼ同じ意。

「頗聰明、……」は「與孟尚書書」の言葉。前條參照。

「是文公不曾理會他病痛」について、「他」をここでは大顛のことと解したが、韓愈自身のこととして考えることもできる。「與大顛師書」の朱子「考異」に、「然靈山石刻張繫所

撰、其間載韓公問大顛云、西國一真之法、何不教人。顛云、教人達性、離無明貪嗔驕慢、不生嫉妬。此亦釋子常言、初無難解、但韓、公素所未聞、而顛中其病、故雖不盡解、而適亦有會於心耳」といふ。

なお、「被他纔說得高」の「彼」を、底本は「彼」に作るが、朝鮮古活字本によつて改める。

34 才卿問、「韓文李漢序頭一句甚好」曰、「公道好、某看來有病。」陳曰、「文者、貫道之器。」且如六經是文、其中所道皆是這道理、如何有病。」曰、「不然。這文皆是從道中流出、豈有文反能貫道之理。文是文、道是道、文只如喫飯時下飯耳。若以文貫道、却是把本爲末。以末爲本、可乎。其後作文者皆是如此。」因說、「蘇文書正道、甚於老佛、且如易所謂「利者義之和」、却解爲義無利則不和、故必以利濟義、然後合於人情。若如此、非惟失聖言之本指、又且陷溺其心。」先生正色曰、「某在當時、必與他辯。」却笑曰、「必被他無禮。」友仁。

才卿がたずねた、「韓文の李漢の序のはじめの一句はすばらしいですね。」いわれるには、「君はすばらしいという

が、私から見ると缺點がある。」陳がいった、「文なる者は貫道の器なり」とありますが、例えば六經は文ですが、そこでいつていることはみなこの道です。どうして缺點などありませんか。」いわれるには、「いやちがう。この文はみな道から出てくるのであつて、文のほうが道を貫くなどという道理があるか。文は文、道は道であり、文はただ飯を食うときのおかずのようなものにすぎん。文で道を貫くなどは、本を末とし、末を本とするもので、よいわけがない。後に文章を作る者はみなこの手合いだ。」そこでいわれるには、「蘇軾の文が正道を損なうのは、老莊や佛教よりもひどい。たとえば『易』に「利は義の和なり」とあるのを、「義は利がなければ調和せず」、だから利によつて義を濟つてこそ人情に合するなどと解釋する。それでは、聖人のことばの本旨を失うのみならず、私心に溺れてしまうことになる。」先生は、きつとして、「私がその時いたら、必ず彼にいつてやった」といわれたが、また笑いながら、「きつと邪険にされたるうなあ」といわれた。郭友仁記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 才卿↓陳才卿 曰公道好↓先生曰公道

好 其中所道↓其中所說 曰不然↓先生曰不然 必與他辯↓  
必與他辨

(注) 李漢「昌黎先生集序」は、「文者、貫道之器也。不深於斯道、有至焉者不也」の句で始まる。李漢は韓愈の門人。

『舊唐書』卷一七一。『新唐書』卷七八。

「下飯」は、おかず。「子野正食羅列珍品甚盛、水生適

至、子野指謂公曰、試觀之、何物可下飯乎。生遍視良久曰、此皆未可、唯饑可下飯爾。」(范公偁「過庭錄」)

「利者義之和也」は「易」乾卦「文言傳」の語。蘇軾「易傳」に「利非亨則偏滯而不和、義非利則慘冽而不和」という

(記錄者) 郭友仁は、字は德元。山陽の人、臨安に寓す。

「師事年攷」二〇六。

35 柳文局促、有許多物事、却要就些子處安排、簡而不古、更說些也不妨。「封建論」并數長書是其好文、合尖氣短。如人火忙火急來說不及、又便了了。揚。柳文。

柳宗元の文は窮屈で、たくさんのことを、せまい範圍で始末をつけようとしており、簡潔だが古樸さに缺ける。もう少し述べてもよいのに。「封建論」やいくつかの長い書簡はよいものだが、詰めがせっかちだ。あたふたとやっつけた人が、肝腎なことにふれぬまま、やめてしまったみた

いだ。包揚記す。以下柳宗元の文について。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「局促」は、窮屈なこと。「毛鄭、所謂山東老學究。

歐陽會文章、故詩意得之亦多。但是不合以今人文章如他底意思去看、故皆局促了詩意。」(詩一 論讀詩 解詩「一八〇・

2020) のように、動詞にも用いられる。

「簡古」を柳宗元の文章への評語としてもちいた例は、

「東坡題跋」「書黃子思詩集後」に、「柳宗元發纖穠於簡古」とあるものなどが挙げられよう。

「合尖」は、最後の詰め。「選人得初舉狀、謂之破白。末後一紙湊足、謂之合尖、如造塔上頂之意。」(趙昇「朝野類

要」餘記「破白合尖」)

36 柳子厚文有所模倣者極精、如自解諸書、是倣司馬遷與任安書。劉原父作文便有所倣。

柳子厚の文には模倣のしかたがたいへんきめこまかなものがある。自分の辯明のためのいくつかの書簡などは、司馬遷が任安に與えた書に倣っている。劉原父の文章にも、模倣したところがある。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) ①「如自解諸書」は、「寄許京兆孟容書」「與楊京兆憑書」(ともに『柳河東集』卷三〇) など、永州に流されたときの書簡を指しているであろう。

②「與任安書」は、「報任少卿書」。「文選」卷四一。

③「劉原父」は、劉敞(一〇一九—一〇六八)。原父は字。公是と號する。「宋元學案」卷四。「宋史」卷三一九。「論文

上」72條にも「劉原父才思極多、湧將出來、每作文、多法古、絕相似。」(3313)と云々。

37 「宮沈羽振、錦心繡口」、柳子厚語。璣。

「宮沈羽振、錦心繡口」とは柳子厚の語だ。滕璣記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 柳宗元「乞巧文」に「駢四儷六、錦心繡口、宮沈羽振、笙簧觸手」とある。古文家として知られる柳宗元が駢體の文章も多く作っていたことを朱子はしばしば指摘するが、これもその一例。なお、文體としての「四六駢儷」の語はここに由來する。

38 韓千變萬化、無心變、歐有心變。「杜祈公墓誌」說一件未了、又說一件。韓「董晉行狀」尙稍長。權德輿作宰相神道碑、只一板許、歐蘇便長了。蘇體只是一類。柳「伐原

議」極局促、不好、東萊不知如何喜之。陳後山文如「仁宗飛白書記」大段好、曲折亦好、墓誌亦好。有典有則、方是文章。其他文亦有大局促不好者、如「題太白像」。「高軒過」古詩、是晚年做到平易處、「高軒過」恐是絕筆。又一條云、「後山「仁宗飛白書記」、其文曲折甚多、過得自在、不如柳之局促。」總論韓柳歐蘇諸公。

韓愈の文章の千變萬化は、無心の變化で、歐陽脩のそれは、有心の變化だ。「杜祈公墓誌銘」などは、一つのことをいいおえぬうちに、もう別のことをいいます。韓愈の「董晉行狀」もやはりやや長い。權德輿の書いた宰相の神道碑は一葉ほどの長さだが、歐陽脩・蘇軾ではずっと長くなっている。蘇軾の文體はもっぱら同じ調子だ。柳宗元の「伐原議」は、極めて窮屈でよくない。呂東萊がどうしてこの文を氣に入っていたのか氣が知れない。陳師道の文章は、「仁宗飛白書記」のようなものは、たいそうよい出來で、いりくんだあやも良い。墓誌も良い出來だ。きちんとした規律があり、これこそ文章だ。そのほかの文章にはきわめて窮屈でよくないものもあるが、「題太白像」「高軒



過」などの古詩は、晩年の平明な境地に至っており、「高軒過」はたぶん絶筆だろう。また一條に云う、「陳師道の「宗飛白書記」は、その文章にあやが大變多いが、筆が自在で、柳宗元のように窮屈ではない。」韓愈・柳宗元・歐陽脩・蘇軾などの諸公を總論する。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

朝鮮古活字本 其他文亦有大局促不好者↓其他文亦有太局促不好者

(注) 「杜祈公墓誌」は、「太子太師致仕杜祈公墓誌銘」。「歐陽文忠公集」卷三一。

「董晉行狀」は、「故金紫光祿大夫・檢校尙書左僕射・同中書門下平章事・兼汴州刺史・充宣武軍節度副大使・知節度事・管内支度營田汴宋毫穎等州觀察處置等使・上柱國・隴西郡開國公・贈太傅董公行狀」。(「昌黎先生集」卷三七)。

權德輿(七五九―八一八)には、多くの神道碑が遺されており、「作宰相神道碑」は特定のいづれかを指すよりは、總じて述べたものであろう。朱子の言うように、のちのものに比べると、比較的短い作品が多い。「唐文粹」卷五六に「唐丞相中書侍郎齊抗神道碑」が收められる。また「全唐文」卷四九七より卷五〇一を参照。「舊唐書」一四八本傳には「於述作特盛、六經百氏、遊泳漸漬、其文雅正而弘博、王侯將相

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

洎、當時名人薨歿、以銘紀爲講者、什八九、時人以爲宗匠焉」という。

「一板」は、版木一枚分のこと。一葉。「讀書不可貪多、且要精熟。如今日看得一板、且看半板、將那精力來更看前半板。」(「讀書法上」一〇・106)。

「宋文鑑」は卷一四五から一四八にかけて歐陽脩・蘇軾らの神道碑を収めるが、權德輿のものに比べれば明らかに長い。例えば蘇軾の「富鄭公神道碑銘」などは、まるまる一卷を占めるほど長大なものである。

「伐原議」は、「晉文公問守原議」(「柳河東集」卷四)。呂祖謙「古文關鍵」は、「柳文」の冒頭に「晉文公問守原議」を置き、「看回互轉換、貫珠相似、辭簡意多。大抵文字使事、須下有力言語」という。

「陳後山」は、陳師道。「宋史」卷四四四。「陳師道、字履常、一字無己、彭城人。……學者稱爲後山先生。」(「宋元學案」卷四 正字陳後山先生師道)

「仁宗飛白書記」は、「御書記」(「後山居士集」卷一五)。「陳師道の墓誌銘は、『後山居士集』卷一八に「宋處士墓銘」「李夫人墓銘」をはじめ八篇が見える。

「有典有則」は「尙書」の語。「其四曰、明明我祖、萬邦之君、有典有則、貽厥子孫。」(「五子之歌」)

「題太白像」は、「題畫李白」(「後山居士集」卷六)。「高軒過」は、「題明發高軒過圖」(「後山居士集」卷六)。

王直方「詩話」(「詩話總龜」前集卷三四「詩讖門」所引)にも「陳無已賦高軒過詩云、晚知書畫真有益、却悔歲月來無多、不數月遂卒」とある。

「曲折」は、文章のこまかいあや。

39 東坡文字明快。老蘇文雄渾、儘有好處。如歐公會南豐韓昌黎之文、豈可不看。柳文雖不全好、亦當擇。合數家之文擇之、無二百篇。下此則不須看、恐低了人手段。但採他好處以爲議論、足矣。若班馬孟子、則是大底文字。道夫。

東坡の文章は明快だ。老蘇の文章は雄渾で、良いところがたくさんある。歐公・曾南豐・韓昌黎の文章は、讀まないわけにはいくまい。柳宗元の文章は、すべてが良いとはいえないが、選ぶべきものがある。これら數家の文章全體から良いものを選びとると、二百篇にも満たない。これ以下のもは讀む必要はない。文章の腕が鈍るだけだろう。その良いところだけをとって議論とすれば十分だ。班固・司馬遷・孟子などは、規模の大きな文章だ。楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 論文下(作文二に作る)に所收。

(注) 「手段」は、技倆、腕前。「大凡做事底人、多是先其

大綱、其他節目可因則因、此方是英雄手段。」(「本朝」一  
二七・3042)

「曾南豐」は、曾鞏(一〇一九—一〇八三)。字は子固、建昌南豐の人。「宋史」卷三一九。

40 韓文高。歐陽文可學。曾文一字挨一字、謹嚴、然太迫。又云、「今人學文者、何曾作得一篇。枉費了許多氣力。大意主乎學問以明理、則自然發爲好文章。詩亦然。」

韓愈の文章は格調が高い。歐陽脩の文章は、お手本になる。曾鞏の文章は、一字一字ゆるがせにせず、謹嚴だが、せせこまし過ぎる。またいわれた、「今の人で文章を學ぶ者に、まともな文章を一篇だつて作れたことがあるだろうか。多くの精力を無駄に費やしているのだ。要は學問して道理を明らかにすることで、そうすれば、自然によい文章になつて表われるものだ。詩についても同様だ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「迫」は、性急なこと、せせこましいこと。「迫切」に同じ。「讀書法下」70條法參照。

41 國初文章、皆嚴重老成。嘗觀嘉祐以前誥詞等、言語有甚拙者、而其人才皆是當世有名之士。蓋其文雖拙、而其辭謹重、有欲工而不能之意。所以風俗渾厚。至歐公文字、好底便十分好、然猶有甚拙底、未散得他和氣。到東坡文字便已馳騁、忒巧了。及宣政間、則窮極華麗、都散了和氣。所以聖人取「先進於禮樂」、意思自是如此。國朝文。

本朝初めの文章は、みな重々しく老成している。かつて嘉祐年間以前の誥詞などを見たが、ことばは至ってつたないものもあつたけれど、書いた人はみな當世の名高い人物だつた。思うに、その文章はつたなくとも、言葉遣いはどつしりして、巧みに書こうとしてもできない心持ちがでていた。世の風俗が淳樸だつたわけさ。歐公の文章になると、良くできたものはないへんよいのだが、なおはなはだつたないものもあつて、まだ大らかさを發散できていない。東坡の文章になると、もう思うままに跳ね回つて、ずいぶんと達者なものだ。政和・宣和年間になると、華麗さを追求して、大らかさを發散しつくしてしまつた。古の聖人が、「先進の禮樂におけるや（野人なり）」の方を選んだのは、

自ずとこうした考えだつたのさ。本朝の文章について。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く。

〔注〕 「嘉祐」は、一〇五三—一〇六三。仁宗の治世。

「先進於禮樂」は、「論語」の語。「子曰、先進於禮樂、野人也。後進於禮樂、君子也。如用之、則吾從先進。」（「先進」）。朱子の「集注」に、「程子曰、「先進於禮樂、文質得宜。今反謂之質朴、而以爲野人。後進於禮樂、文過其實。今反謂之彬彬、而以爲君子。蓋周末文勝、故時人之言如此。不自知其過於文也」。用之、謂用禮樂。孔子既述時人之言、又自言其如此。蓋欲損過以就中也」といふ。

「渾厚」は、敦厚、淳樸。雙聲の語。「風俗渾厚」の四字でも、しばしばもちいられる。「……、一時風俗渾厚、辭遜之美、人兩賢之。」（周輝「清波別志」下）

「和氣」は、古くからある語であり、用例もさまざまだが、ここでは、大らかさ、と解した。『禮記』祭義に「有和氣者必有愉色」とあり、また『近思錄』卷一四に「謝顯道云、明道先生坐如泥塑人、接人則渾是一團和氣」などという。

「馳騁」は、あちこち跳ね回ること。「公今却是讀得一書、便做得許多文字、馳騁跳躑、心都不在裏面。」（朱子一七訓門人八）一〇・2903）

「政和」は、一一一一—一一一八、「宣和」は、一一一九—一二二五。ともに徽宗の治世。

42 劉子澄言、「本朝只有四篇文字好。」「太極圖」「西銘」

「易傳序」「春秋傳序」。因言、杜詩亦何用。曰、「是無意思。大部小部無萬數、益得人甚事。」因傷詩文之弊、謂、

「張才叔「書義」好。「自靖人自獻於先王義」、胡明仲醉後每誦之。」又謂、「劉棠「舜不窮其民論」好、歐公甚喜之。

其後姚孝寧「易義」亦好。」壽昌錄云、或問「太極」「西銘」。曰、「自孟子以後、方見有此兩篇文章。」

劉子澄が、「本朝では四篇の文章だけがよい。」「太極圖」

「西銘」「易傳序」「春秋傳序」がそれだ」といい、ついでに「杜詩も何の役に立とう」といった。いわれるには「あれはつまらん。長いやら短いやら無數にあるが、人に何の益があるう。」そこで時文の弊害に心を痛めて、いわれるには、「張才叔の「書義」はよくできている。「自靖人自獻於先王義」は、胡明仲は酔うとこれをいつも口ずさんだものだ。」またいわれた、「劉棠の「舜不窮其民」はよく出來ていて、歐公はたいへん氣に入っていた。その後では姚孝寧の「易義」もよく出來ている。」壽昌の記録にいう、「ある人が「太極」「西銘」について聞くと、いわれた、「孟子よ

り以後では、この二篇だけが目につく。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

朝鮮古活字本 自孟子以後↓自孟子已後

(注) 「劉子澄」は、劉清之(一一三四—一九〇)。子澄は字。「宋元學案」卷五九「清江學案」。また同卷四九「晦翁學案下」晦翁同調にも名を留める。「宋史」卷四三七。

「太極圖」は、周敦頤「太極圖說」。「宋文鑑」卷一〇七。

「西銘」は、張載の作。「宋文鑑」卷一〇七。

「易傳序」および「春秋傳序」は、程頤の作。ともに「宋文鑑」卷九〇。朱子の「杜詩」に對する評價は、とくに晩年の作に對して嚴しい。「論文下」を參照。黃庭堅らが杜甫の詩を尊崇したのに反撥した側面もある。

「萬無數」は、數えきれないほど多いこと。「六月、有青蠅萬無數(師古曰、言其極多、雖欲以萬數計之而不可得、故云無萬數)、集未央宮殿中朝者坐。」(「漢書」成帝紀)

「張才叔」は、張庭堅。才叔は字。「宋元學案」卷一九。

「宋史」卷三四六。その「書義」はいま傳わらない。「經義考」卷七九。「宋文鑑」卷一一「經義」には、「惟幾惟康其弼直」義および本條に言及されている「自靖人自獻於先王」義が收められているが、「書義」の逸文であろう。

「胡明仲」は、胡寅(一〇九八—一一五六)。明仲は字。建寧崇安の人。諡は文仲。「宋元學案」卷四一。「宋史」卷四三五。

「劉棠」は、字が召美というほかは未詳。吳升「優古堂詩話」には、「舜不窮其民」が、元祐年間の省試の課題であり、劉棠はこのとき首席でとおったこと、その文を「東坡見之、大加歎賞、以其不類時文、因以劉窮呼之」のように蘇軾が賞賛したことが見える。

「姚孝寧」およびその「易義」は、未詳。

43 「李泰伯文實得之經中、雖淺、然皆自大處起議論。首卷「潛書」「民言」好、如古「潛夫論」之類。「周禮論」好、如宰相掌人主飲食男女事、某意如此。今其論皆然、文字氣象大段好、甚使人愛之、亦可見其時節方興如此好。老蘇父子自史中「戰國策」得之、故皆自小處起議論、歐公喜之。李不軟貼、不爲所喜。范文正公好處、歐不及。李晚年須參道、有一記說達磨宗派甚詳、須是大段去參究來。」又曰、「以李視今日之文、如三日新婦然。某人輩文字、乃蛇鼠之見。」

「李泰伯の文章はまことに經書から得たもので、ことばに深みはないが、どれも大きなところから議論を起こしている。首卷の「潛書」「民言」はよく出来ていて、古えの

朱子語類論文篇譯注(二)(興膳・木津・齋藤)

「潛夫論」の類だ。「周禮論」もよく出来ていて、宰相が君主の飲食男女のことをつかさざることなど、私も同じ考えだ。いまでもその論はみな妥當で、文章の氣概もたいへんすばらしく、大いに心惹かれる。時代が興らんとするときはかくもすばらしいのだとわかる。老蘇父子の文章は史書の「戰國策」から得たものだから、どれも小さなところから議論を起こしており、歐公はこれを好んだ。李の文章にはしなやかさがないので、氣に入らなかつたのだ。范文正公のよいところは、歐だつて及ばない。李は晩年に參禪するようになって、ある記の中で達磨の宗派についてたいへん詳しく述べている。さだめし大いに研究したのでらう。」またいわれた、「李の文章から今日の文章を見ると、嫁に來て三日目の新婦同然だ。ある連中の文章など、蛇や鼠同然のけちな了見だ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

朝鮮古活字本 李晚年須參道↓李晚年須參禪

(注) 「李泰伯」は、李觀(一〇〇九—一〇五九)。泰伯は字。建昌軍南城の人。皇祐初年に、范仲淹により太學助教に推薦される。嘉祐年間には、太學說書などを歴任した。本條

では、彼が晩年佛教に理解を示したことに觸れるが、彼は本來佛教と孟子を好まなかつたといわれる。「宋元學案」卷一五五。「宋史」卷一九一。

「潛書」は、「潛書十五篇」。序に「泰伯閑居、有書十五篇、憤弔世故、警憲邦國、遐探切喻、辭不柔伏。噫、道未行、速謗何也。姑待知者而出之乎。乃命曰潛書」という。「直講李先生文集」卷二〇。

「民言」は「慶曆民言三十篇」。序に「慶曆三年屏居里中、自念生宦學、其秉心也勞、其慮事也多、既不克進、且爲編戶以死、終無一言、其何補於世。記曰、上酌民言、則天下施。故爲慶曆民言、凡三十篇」という。「直講李先生文集」卷二一。

「潛夫論」は、後漢・王符撰。十卷。すべて三十五篇あり、時世を痛烈に批判する。

「周禮論」は、「周禮致太平論五十一篇」。「直講李先生文集」卷五より一四。「宰相掌人主飲食男女事」は、その「内治篇」に述べるところを指す。なお「飲食男女」の語は、もちろん「禮記」禮運篇「飲食男女、人之大欲」にもとづく。

「軟貼」は、しなやかさ。貶義にもちいれば、なよなよ。

やや時代は下るものの、「琵琶記」に「軟法」、「西廂記」には「軟攤」などの「軟貼」とほぼ同義の擬態語が見える。それぞれ「貼」「法」が疊韻、「貼」「攤」が雙聲となっており、俗語のレベルでこのような語形の擬態語が多数用いられてい

たことを想像させる。

「范文正公」は、范仲淹（九八九—一〇五二）。字は希文、吳縣の人。文正は諡。朱子は「范文正傑出之才」（本朝三自國初至熙寧人物）一二九・3088と、高く評價しており、同時に彼が俊才を多く當用し得たことにも、次のように言及している。「……至范文正時使大厲名節、振作士氣、故振作士大夫之功爲多」（同上、3086）

「有一記達磨宗派甚詳」は、「建昌軍景德寺重修大殿并造彌陀閣記」を指している。「直講李先生文集」卷二四。

「三日新婦」は、おどおどして自信の無いさま。行動に拘束の有ることを例える俗語。南朝の頃から用例は見える。

「景宗謂所親曰、今來揚州作實人、動轉不得、路行開車幔、小人輒言不可。閉置車中、如三日新婦。遭此邑邑、使人無氣。」（梁書・曹景宗傳）「方欲俛首書冊以終餘年、又自度不能爲三日新婦。」（陳亮「又與呂伯恭正字書」）

「蛇鼠之見」は、用例を見いだしたが、蛇鼠が臆病でつまらぬ者の譬であることから、了見の狭い考えをいうのであろう。

44 先生讀宋景文「張巡贊」、曰、「其文自成一家。景文亦服人、嘗見其寫六一「瀧岡阡表」二句云、「求其生而不得、則死者與我皆無恨也。」

先生は宋景文の「張巡贊」を讀んでいわれた、「文章はおのずと一家を成している。景文は他人の文章に敬服もしていて、六一居士の「瀧岡阡表」の「其の生を求めて得ざれば、則ち死者と我と皆恨み無きなり」という二句を書寫したのを見たことがある。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「宋景文」は、宋祁(九九八―一〇六一)、字は子京。景文は諡。歐陽脩とともに「新唐書」を編纂したことは有名。

「宋史」卷二八四。

「張巡贊」は、張巡の傳の收められた「新唐書」卷一九二「忠義中」の「贊」を指す。

「六一」は、歐陽脩(一〇〇七―一〇七二)。字は永叔。

號の由來は「六一居士傳」(『歐陽文忠公集』卷四四)に詳しい。「瀧岡阡表」(『歐陽文忠公集』卷二五)に「吾曰、生可求乎。曰、求其生而不得、則死者與我皆無恨也。矧求而有得邪。以其有得、則知不求而死者有恨也」という。

#### 45 溫公文字中多取荀卿助語。

溫公の文章には荀卿のことばづかいをよく援用している。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

(注) 「溫公」は、司馬光(一〇一―一〇八六)。字は君實。溫公は位號の太師溫國公の畧。諡は文正。「宋史」卷三三六。

#### 46 六一文一倡三歎、今人是如何作文。

六一居士の文章は一倡三歎ものだ。今の人は文章を作るなんてものじゃない。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「一倡三歎」は、詩文のすばらしいことをいう。「清廟之瑟、朱絃而疏越、壹倡而三歎、有遺音者矣。」(『禮記』樂記)「清廟之歌、一倡而三嘆也。」(『荀子』禮論)

47 「六一文有斷續不接處、如少了字模樣。如「祕演詩集序」「喜爲歌詩以自娛」、「十年間」、兩節不接。「六一居士傳」意凡文弱。「仁宗飛白書記」文不佳。制誥首尾四六皆治平間所作、非其得意者。恐當時亦被人催促、加以文思緩、不及子細、不知如何。然有紆餘曲折、辭少意多、玩味不能已者、又非辭意一直者比。「黃夢升墓誌」極好。」問先生所喜者。云、「『豐樂亭記』」揚。

六一居士の文章には、きれぎれで繋がらず、字が缺けて  
いるように感じられるところがある。「祕演詩集序」の、  
「歌詩を爲るを喜びて以て自ら娛む……」と「十年の間  
……」の二節は繋がらない。「六一居士傳」は、意趣も文  
章も凡庸だ。「仁宗飛白書記」は文章がよくない。制誥は  
初めから終わりまで四六文で、みな治平年間の作だが、得  
意の出来ばえではない。たぶん當時誰かに急せき立てられて  
作ったものだろうが、おまけに構想も弛緩しげんしていて、細か  
いところまで注意が行き届いていない。どうしたわけだろ  
うねえ。けれども内容に紆餘曲折があり、少ない語で豊か  
な意を包んでいて、つきせぬ味わいのある作品は、語も意  
も一本調子なものではない。「黃夢升墓誌」は上出来  
だ」先生のお氣に入りはと尋ねると、「豊樂亭記」だね」  
といわれた。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「祕演詩集序」は、「釋祕演詩集序」とも。「歐陽文忠  
公集」卷四一。「宋文鑑」卷八六。該當箇所を示せば、「然喜  
爲歌詩以自娛、當其極飲大醉、歌吟笑呼、以適天下之樂、何  
其壯也。一時賢士皆願從其游、予亦時至其室。十年之間、祕

演北渡河、東之濟・鄆無所合、困而歸。」

「六一居士傳」は、45條注參照。

「仁宗飛白書記」は、「仁宗御飛白記」(「歐陽文忠公集」  
卷四〇)。

「制誥」が、具體的にいずれの作を指すかは未詳。「治平」  
は、一〇六四—一〇六七。英宗の治世。「歐陽文忠公集」の  
うちの「外制集」「內制集」に收める制誥はいずれも治平以  
前の作であり、また、「宋文鑑」卷三四「制」および卷三七  
「誥」に採られる歐陽脩の制誥も同様である。

「黃夢升墓誌」は、「歐陽文忠公集」卷二八。「宋文鑑」卷  
一四〇。

「豊樂亭記」は、「歐陽文忠公集」卷三九。「宋文鑑」卷七  
八。

「催促」について、本條と同様、文章の完成をせきたてる  
用例としては、次のようなものが挙げられる。「少頃、中使  
傳宣云、有旨、令作召趙相公文字來。於是魏公指揮堂吏作文  
字奏上、秦大不樂。魏公去國、趙相至、秦譖魏公於趙公曰、  
德遠到堂中、尙未肯去、直到中使催促召相公文字、方上馬。  
……」(「本朝五 中興至今日人物上」一三一・3147)

48 陳同父好讀六一文、嘗編百十篇作一集、今刊行。「豊  
樂亭記」是六一文之最佳者、却編在拾遺。



陳同父は六一居士の文章を愛讀して、かつて百篇ほどを編んで一集とし今も刊行されている。「豊樂亭記」は六一居士の文章中で最高の作なのに、「拾遺」のなかに編まれている。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く。

(注) 「陳同父」は、陳亮(七五九―八一八)。同父は字、また同甫とも。『宋元學案』卷五六。『宋史』卷四三六。『書歐陽文粹後』(「龍川文集」卷二三)には、「右歐陽文忠公文粹一百三十篇」とあるが、その書はいま傳わらない。

「豊樂亭記」については前條の注を参照。

49 歐公文字鋒刃利、文字好、議論亦好。嘗有詩云、「玉顏自古爲身累、肉食何人爲國謀。」以詩言之、是第一等好詩。以議論言之、是第一等議論。拱壽。

歐公の文章は刃物のように鋭く、文章もよければ、議論もよい。こんな詩がある、「玉顏 古より身の累わづらひと爲る、肉食 何人か國の爲に謀らん」。詩としても、第一級の詩だし、議論としても、第一級の議論だ。董拱壽記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 拱壽(記錄者名) ↓ 録

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

朝鮮古活字本 拱壽(記錄者名) ↓ 拱壽

(注) 「玉顏……」は、「唐崇徽公主手痕和韓內翰」(「歐陽文忠公集」卷二三)に、「故鄉飛鳥尙啁啾、何況悲笳出塞愁。青塚埋魂知不返、翠崖遺迹爲誰留。玉顏自古爲身累、肉食何人與國謀。行路至今空歎息、巖花澗草自春秋」とある。なお「肉食」の句は、「左傳」莊公十年の「其鄉人曰、肉食者謀之、又何間焉」にもとづく。

(記錄者) 董拱壽は、字は仁叔。『師事年改』續二八四。

50 「欽夫文字不甚改、改後往往反不好。」亞夫曰、「歐公文字愈改愈好。」曰、「亦有改不盡處。如『五代史』宦者傳末句云、然不可不戒。當時必有載張承業等事在此、故曰、然不可不戒。後既不欲載之於此、而移之於後、則此句當改、偶忘削去故也。」方子。

「欽夫は文章をあまり手直ししなかったが、手直しするとかえって悪くなるが多かった。」亞夫が「歐公の文章は手直しするほどよくなりますね」というと、いわれるには、「手直ししきれないところもあるさ。『五代史』宦者傳(序)の最後に、「然れども戒めざるべからず」とある。

當時はきつと張承業などのことがここに載せられていたのだ。「然れども戒めざるべからず」といったのだ。あとでここには載せなくなつて、後ろのほうに移したので、この句も改めるべきだったのに、たまたま削り忘れたせいだ。」方子記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 論文下(作文二に作る)所收。五代史宦者傳↓五代史宦者傳 當時必有↓當時必是 後既不欲載之於此↓後既不欲載之於後

朝鮮古活字本 五代史宦者傳↓五代史宦者傳  
(注) 欽夫は、張樑(一一三三―一一八〇)。欽夫は字。號は南軒。『宋元學案』卷五〇。『宋史』卷四二九。亞夫は、晏淵。『師事年攷』196。

『新五代史』宦者傳は、「嗚呼、自古宦・女之禍深矣。明者未形而知懼、暗者患及而猶安焉、至亂亡而不可悔也。雖然、不可以不戒。作宦者傳」の序で始まり、張承業および張居翰の傳が續く。

51 因改謝表、曰、「作文自有穩字。古之能文者、纔用使用著這樣字、如今不免去搜索修改。」又言、「歐公爲蔣穎叔輩所誣、既得辨明、謝表中自敘一段、只是自胸中流出、更

無些窒礙、此文章之妙也。」又曰、「歐公文亦多是修改到妙處。頃有人買饒錄作「見」。得他「醉翁亭記」藁、初說「滁州四面有山」、凡數十字、末後改定、只曰、「環滁皆山也」五字而已。饒錄云、有數十字序滁州之山。忽大圈了、一邊注「環滁皆山也」一句。如尋常不經思慮、信意所作言語、亦有絕不成文理者、不知如何。」廣。

謝表を手直しされたついでにいわれた、「文章を書くにはおのずとしつくりくることばがある。いにしえの文章家は、こうしたことばを使うとすぐに使いこなしたものが、いまはどうしてもあれこれ考え回り手直しする。」またいわれた、「歐公は蔣穎叔などの連中に讒言されたが、辯明の機會を得て、謝表のなかの自らのことを述べた一段は、すつかり心のうちから流れ出ていて、少しもよどむところがない。これぞ文章の妙だ。」またいわれた、「歐公の文章には手直ししてすばらしくなったものも多い。近頃「醉翁亭記」の原稿を買った(饒錄では「見た」)者がいるが、はじめは「滁州四面に山有り」などと、數十字を連ねていたのが、最後には改訂されて、ただ「環滁皆山也」の五

字だけになった（饒録にいう、「滁州の山について述べる數十字があったが、大きく圈點をして、傍らに「環滁皆山也」の一句を注する）。普段さして思慮をめぐらさず、思うに任せて作ったような文章で、まったくすじみちを成さないようなものもあるのは、どうしたわけかねえ。」輔廣記す。

（校勘）朝鮮古寫本 謝表中↓謝表（細字雙行）中 得他醉翁亭記葉↓得他醉翁亭記 饒録↓一句を缺く。

（注）「窒礙」は、滞ること。「讀書法下」59條注を参照。「冒頭の「謝表」が、具體的にいづれを指すか、未詳。『朱文公文集』卷八五には、「南康軍到任謝表」以下、十一篇を収める。

「蔣穎叔」は、蔣之奇（一〇三二—一一〇四）。穎叔は字。常州宜興の人。嘉祐二年の進士。神宗年間の初め、殿中侍御史に上り、歐陽脩を誣告したかで貶官されたものの、飢饉に臨み、水利を治め流民を養うことに功績を挙げ、江淮荆浙發運使に昇任、のち觀文殿學士に任命される。諡は文穆。

「宋史」卷三四三。

歐陽脩の「謝表」は、「亳州謝上表」を指す。「歐陽文忠公集」卷九三。「宋文鑑」卷六四。「自敘一段」とは、その中の「再念臣性實甚愚、而踈於接物。事多輕信者、蓋以至誠。如彼匪人、失於泛愛。平居握手、惟期道義之交、延譽當朝、常

朱子語類論文篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

巧齒牙之論、而未乾鷹鷂之墨、已彎射羿之弓。知士其難、世必以臣爲戒。常情共惡、人將不食其餘。而臣與遊既昧於擇賢、在滿不思於將覆、自貽禍鬻、幾至顛隲」あたりを指すか。「醉翁亭記」は、『歐陽文忠公集』卷三九。「宋文鑑」卷七八。「環滁皆山也」の句で始まることは有名。

52 前輩見人、皆通文字。先生在同安、嘗見六一見人文字三卷子、是以平日所作詩文之類楷書以獻之。振。

昔の人は人に見えるとき、みな文章を届けたものだ。先生は同安におられたとき、六一居士が人にお目見えしたときの文章三卷をごらんになったことがあったが、それはふだん作った詩文の類を楷書で書いて獻呈したものだった。吳振記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く。

（注）「同安」は、福建路泉州府下の縣。朱子は紹興二十三年（一一五六）年から二十七（一一五七）まで主簿として任にあった。「朱子三 外任 同安主簿」（一〇六・2639—2640）を参照。

53 歐公文章及三蘇文好處、只是平易說道理、初不曾使差

異底字換却那尋常底字。儒用。

歐公の文章と三蘇の文章のよいところは、もつぱら平易に道理を説いて、ふつうのことはを新奇なことに換えたりは決してしなかつたことだ。李儒用記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 儒用(記錄者名) ↓元秉

(注) 「差異」は、見慣れない、奇異な、の意。第26條「詭異」とも意は重なり合う。「前輩做文字、只依定格依本分做、所以做得甚好。後來人却厭其常格、則變一般新格做。本是要好、然未好時先差異了。」(「論文上」一三九・330)

「三蘇」は、蘇洵(一〇〇九―一〇六六)、蘇軾(一〇三六―一一〇二)、蘇轍(一〇三九―一一二二)。

なお、「好處」はもと「好説」に作るが、朝鮮古寫本および古活字本によって改めた。

54 文字到歐・曾・蘇、道理到二程、方是暢。荆公文暗。

文章は歐(陽脩)・曾(鞏)・蘇(軾)になって、道理は二程になって、はじめてよく通るようになった。荆公の文章は通りが悪い。

(注) 「二程」は、程顥(一〇三二―一〇八五)・程頤(一〇三三―一一〇七)。

「荆公」は、王安石(一〇二一―一〇八六)、字は介甫。撫州臨川の人。荆國公に封じられた。『宋元學案』卷九八。『宋史』卷三二七。「本朝四」には、王安石に對する同様の評が、「先生論荆公之學所以差者、以其見道理不透徹。……」(一三〇・397)のように、多く見られる。

譯注者後記 この譯注は、齋藤が起草した原案をもとに、執筆者三人が檢討を加え、齋藤がこれらを整理して稿を成した。なお、本稿作成の過程で、周雲喬、副島一郎、谷口洋、西岡淳、原田直枝の諸君による譯注の草稿を参照した。また、金文京氏より教示を受けた箇所がある。謝意を表す。